

フランス、ボルドーより

L'Institut de Bio-Imagerie, Universit de Bordeaux

山本 貴之

(天理よろづ相談所病院)

私は2019年12月よりフランス南西部のボルドー大学で、脳神経画像の研究をしています。ボルドーはワインで有名であるばかりではなく、数年前にはヨーロッパで住みたい街1位に選ばれました。西に行けばフランス中からこぞって人が訪れるビーチがいくつもあり、東を向けば「美しい村」がもっとも多い地域でもあります。私はこのボルドーに、上原記念生命科学財団からの助成のおかげで留学することができています。

ボルドー大学はフランス南西部では最も大きな大学病院であり、いくつもの分野でトップ大学の1つと見做されています。大学病院に隣接して脳神経を専門とする研究所があり、その規模はおそらくヨーロッパ有数で、基礎と臨床が緊密に連携して研究を行うことのできる環境です。実際、私の師事している教授は、大学病院と基礎研究所の2つに研究室を持ち、脳梗塞と多発性硬化症をテーマとして幅広く研究を行なっています。留学中に良い経験ができるかどうかは直接の上司に大きく左右されると聞きますが、この点、彼は大変素晴らしい人間性を持ち合わせていることを事前に知っていましたので、心配はありませんでした。

アメリカの研究所や大病院に比べると技術的な先進性という点では及ばない点があるのは確かで、研究環境はむしろ日本に近いと言えます。といっても、優れた研究は個人の資質や研究費の過多だけによるわけではありません。取り組むべき問題をよく知っていることはもちろんとして、周囲にあらゆる専門家がいるので昼食や道端で気軽に意見交換ができ、他組織と良好な関係が築けているため共同研究しやすいことで、研究が発展しやすい環境が培われています。すべてのフランス人が社交力やマネジメント力が秀でているわけではありませんが、人に会うたびに話をするため予定の時間にはまず来ないというのはフランス人らしいと思います。今の時代、ともすれば競争や予算獲得にあくせくしがちですが、こうした良き大学の雰囲気が残っているのもヨーロッパの良いところですよ。

2020年3月ごろからCOVID-19が爆発的に拡大し、残念ながら当初予定していた研究は変更を余儀なくされました。最初の3ヶ月間のロックダウンは大変厳しく、ほとんど研究を行うことはできませんでした。この期間がフランスに与えたダメージは大きく、経済問題とともに家庭内暴力や学業の遅れ、鬱などが大きな社会問題となりました。そのため、各国と比べると比較的緩い制限措置が取られています。賛否両論はあるものの、おかげで研究室に通うことができ、直接議論を行うことができたのは幸いでした。遠方とのオンラインミーティングが当たり前になった現在、確かに効率はいいものの、やはり直接やり取りした方が

より充実しています。また家族とも、日本のときよりも長い時間を共に過ごすことができているのは、かえって良かったことでもあります。

最後になりましたが、このような貴重な留学の機会を与えて下さいました上原記念生命科学財団の皆様、天理よろづ相談所病院、京都大学の諸先生方に深く御礼申し上げます。